

隣接の遁走曲

附録

四方田犬彦

飯沢耕太郎

詩選集

目次

哀れな Guy de Maupassant の最後の言葉

四方田犬彦 3

夜の眼

飯沢耕太郎 4

麻袋、対岸 I、猫島
(『猫島からの帰還』より)

飯沢耕太郎 6

メランポ
(「金枝」より)

四方田犬彦 12

はまべのうた

飯沢耕太郎 14

哀れな Guy de Maupassant の最後の言葉

四方田犬彦

鏡を

鏡に映っているのはこの俺か

ひしゃげた鼻と醜い口を毎日ぶらさげて歩くのは

この俺か

夕暮れの空が映る

首からどくどくと血を流した

黒枠で囲まれた昨夜の死体

新鮮な肉 黄色い肉

ああ 肉がほしい

闇だ おお闇だ

鳥の羽ばたきが聞こえる

夜の眼

飯沢耕太郎

痴気情事

あるいはチキン・ジョージの

エクセルシオールカフェで

アメリカカーノのレギュラーコーヒーを飲みながら

惨^{サンロード}R0奴商店街を行き交う猿の群れを見渡していると

一天　にわかにかき曇って

いきなり土砂降りの大雨になった

雷と稲妻が　ぴかぴか　どんだん

豪華なドラムとシンバルを打ち鳴らし

いつのまにか　わたしは夜の森のなかにいる

真っ暗な森の

高く聳え立つベンガルボダイジュの樹の根元で

雨に濡れそぼって震えていたら

目の前に

皿のようにおおきな二つの眼があらわれた

長い睫毛がふるふると靡き

眼は左右交互に開いたり閉じたりしている

毛錐体には青白い血管が走り

虹彩には紅くひらめく蛇の舌のような

炎がゆらめく

夜の眼はたしかに

わたしをみつめているのだが

その視線はわたしの軀を突き抜けて

遙か彼方まで届いている

わたしの存在など気にもかけていないのだろう

夜の眼よ！

お前のその強大な眼差しの火矢で

わたしを焼き滅ぼし

あるいは　メデューサの邪眼のような禍々しい視力で

不動の石に変えて欲しい

そう願っては見るもの
望みはおそらく成就しないだろう

落胆のあまり

歯噛みして足を踏み鳴らしても

夜の眼は 無心に開いたり閉じたりしているだけだ

歩みの遅いはずの時が 矢のように過ぎ

わたしはふたたび

痴気情事 あるいはチキン・ジョージの

エクセルシオールカフェにいて

惨R0奴商店街を行き交う猿の群れをぼんやり眺めている

冷房が効きすぎていて

足元が寒い

冷気はカフェの室内を氷河のクレヴァスのように包み込み

コーヒーは冷え切って

錆びた鋼の味がする

これ以上ここにいたら

ひどい風邪をひきそうだ

妙に明るいイルミネーションの方へ出ていくと

猿の群れが白い歯を剥き出して

きやつ きやつ きやつ と囃し立てる。

麻袋 Gunia

飯沢耕太郎

我がつれあい、猿の顔をした子とともに、夜明け前に猫島を出発する。縄でぐるぐる巻きにされて、頭から麻袋をすっぽりとかぶせられ、そのまま舟底に放り込まれたのだ。森の奥で啼き騒ぐ鳥たちのように、祈りとも祝福とも呪詛ともつかぬ声の波が、わたしたちの周りで渦巻いている。腐った魚のような匂いが、荒々しく鼻腔を刺し貫く。

——どこに行くんだろう？ 鍋の底で煮崩れていく野菜みたいな心持ちがする。ここは暗くて寒くて臭いよ。

——心配するな。

——でも……。

——大丈夫だ。しばらくすれば慣れてくるさ。

とは言ってみたものの、わたし自身も振り子のように前後左右に揺れる舟底で、艀の位置を定めるのに心を碎いているに過ぎない。

ひととき高く、出航の合図の銅鑼が打ち鳴らされる。錨を巻き上げるガラガラという音に入り混じって、猫島の数千匹の猫たちが、いつせいに悪意を込めた叫び声を挙げるのが聞こえたような気がする。

——いつもこんな具合だ。不意に麻袋に放り込まれて、舟に載せられ、知らぬ間に次の土地に運ばれていく。

——文句を言っても仕方がない。まだ先は長いよ。いまのうちに眠っておくといい。

——でも……

——心配はいらない。俺はずっと離れやしないから。

舷側を洗う波の音が聞こえてくる。船梁ふなばりの軋む音がそれに重なる。

——あなたとぼくの骨が、きしきし鳴っているようだ。

——傷はまだ痛むかい？

——ほんの少し。

対岸Ⅰ Ng'ambo I

飯沢耕太郎

赤い泥の土地に放り出される
わたしたちを運んできた水の男たちは
額に星のある大鴉に変身して
高曇りの空に消えていった

この土地が

他のすべての場所にとって

対岸としての位置にあることが

火鼠の皮衣をまとった老人たちによって告げられる

——びくびくすることはない

あんたらにはまだ 名前がないのだから

あんたらもまた 泥の塊にすぎないのだから

——俺が名前をつけてやろう

もう一人の老人が

歯のない口を もぐもぐさせながら

震える指をわたしたちに向ける

——そっちのでかいやつ

お前は「ワシワシ クーブワ大きな心配」だ

小さい方は「キーマ ピラ ムキア尻尾のない猿」だな

——いや違う

三人目の老人が口から泡を噴きながら言いつのる

——「シンゴヤ トウイガキリンの首」と「ニヨタ メタメタきらきら星」だ

わたしたちが麻袋から

ごそごそ

這い出してくるのを見て

古い皮を脱ごうとしている蛇のようだと

老人たちは顔じゅうの皺を蠢かせて笑った

裸で震えているわたしたちに

やし酒をたっぷり飲ませてくれた

赤い泥を躰に塗りたくり

彼らが身にまもっていた火鼠の皮衣で包みこんでくれた

——さあ どこにでも行くがいい

でももう二度と戻ってくるなよ

小さな老人たちのなかでいちばん小さなひとりが

そう言いながら背中を蹴とばして

わたしたちを 石と骨の土地へと送り出した。

猫島のことを思い起こそうとすると、乾季の砂地に水路を穿っているような気分になる。それは二重に虚しい作業だ。絶えず吹きつける風、打ち寄せる波のために、島は常にかたちを変えているのだから。また、島自体が浮草のように漂っているので、それが今ほどのあたりにあるのか、まったく知ることができないのだから。

猫島の本当の名前もよくわからない。誰に聞いても違った答えが返ってくる。だが猫島と呼ばれる理由が、この島の実質的な支配者である夥しい猫の群れにあることは明らかである。猫たちはこの島のありとあらゆる場所に出現し、我がものの顔に徘徊している。だが不思議なことに、彼らの存在はわたしたちの生とは二重映しになっているらしく、直接的に影響を及ぼすというわけではない。彼らの姿や声は光や空気のようなもので、この島の住人たちに大きな作用を及ぼしているにもかかわらず、ほとんどその関心を引くことはないようだ。昼夜を問わず、目の前に突然出現し、狂おしげに鳴きわめき、噛み合い、交わり、喉を鳴らしてすり寄ってくる猫たちに、この島に來た最初の頃は、ずいぶん悩まされたものだ。だが、わたしも次第にその色と音がついた幻に慣れて、あまり気にならないようになっていった。

猫以外の猫島の住人たちについては、あまり言うべきことを持たない。というのは、彼らの言葉はわたしには理解しがたく、頻繁に発せられる [W-A-Z-I] あるいは [W-A-Z-I-M-U] という単語を除いては、何を言っているのかよくわからないからだ。この [W-A-Z-I]、あるいは [W-A-Z-I-M-U] という、もはや耳慣れた言葉は、挨拶、祝福、呪詛、嘲笑、憐憫などを含む、極めて多様な意味で用いられるらしく、わたしが最初に知り合うことになったある女などは、この二語以外を一切喋らなかった（少なくともわたしにはそう思えた）。

猫島の住人たちがどのように暮らしを立てているのか、わたしにはよくわからなかった。市場や路上で、食べ物や日用品を商う少数を除いては、男も女も毎朝、半ば崩れかけた街の門をくぐり抜けて、荒野の方へと出てゆく。昼の間は、街はほぼ無人となり、ひっそりと静まり返る。そして日の暮れる頃になると、彼らは両腕を腰の後ろに組み、齒と齒の間にその一日の労働の報酬らしい一片の黄金を噛みしめながら、重い足取りで戻ってくる。門のあたりには、いつでも街に残っていた子どもや老人たちが集まっていた、[W-A-Z-I-M-U] と歓声をあげて彼らを迎える。なかには、感きわまって泣き出す者さえいる。むろん、住人たちの頭や肩の上には猫が一匹ずつ載っていて、あたかも彼らの分身のように辺りを睥睨（へいげい）している。

街自体の構造はきわめて単純であり、この地方の他の街とも似通っている。日干し煉瓦を積み上げた壁が、東西に細長い楕円形に街を取り囲み、その西の端に唯一の門扉が開いている。壁にはところどころ崩れ落ちている箇所があつて、むろん街の出入りがその門だけに限られているわけではない。だが原則として、街に入るのはその扉から、しかも太陽が沈んでから一時間

ほどの間に限られている。街から出ることができるのは、同様に、陽が昇ってから一時間ほどの内である。奇妙なのは、街の境界である壁そのものが、伸び縮みしているように見えることだ。どうやら門扉のある西の端を支点として、呼吸しているように蠢いているらしい。とすれば、夜の間に何者かによって日干し煉瓦の一部が崩され、ふたたび積み上げられるのだろうか。それとも、海に浮かぶ猫島と同様に、街自体が荒野を移動しているのだろうか。

街の唯一の集落は、背骨のように東西に伸びる一本道に沿って広がり、そこから肋骨のような細い道がいくつか伸びている。その心臓の位置に、広場と祭壇のある集会所らしき建物がある。住人たちは細い道の両側に、白蟻の塚のように土を盛り上げて固めた家に住んでいる。その配置は、見かけ上は出鱈目としか思えないが、何かしら彼らにとっての厳密な規則性に従っているようだ。というのは、彼らは自分たちの住処の位置について思い悩んで、家を突き崩して別の場所に移動させることがあるからだ。その突発的な行動は、何かの啓示を受けたとしか思えないほど確信的なものだ。それ以後、彼らのかつての旧居は忌み嫌われる不吉な場所となり、そこに二度と近づくことはない。

街の広場には市が立ち、島の外から来たものも含めて、商人たちがさまざまな店を開く。市は三日、五日、あるいは十日ごとに催される場合もあるし、間がひと月ほど開くこともある。その周期はほとんど出鱈目に思えるのだが、やはりそこにも見えない規則性が働いているようだ。住人たちはあらかじめその日を知っていて、その前日から街全体が浮かれ騒いでいるように感じられる（市の前日と当日の仕事は休みになる）。彼らは上機嫌で、人に会うたびに膝の裏側を叩き合う挨拶を交わし、通貨として使われる宝貝に糸を通して、八個ずつの束としてまとめるのに忙しい。市は男女一組ずつの双子が、彼らの持ち物である帽子、腰布、腕輪などを象徴的に交換することから開始される。贖われる商品は多種多様で、「猫島で猫が笛を吹けば、対岸で猿が尾を振る（何か欲しいものがあれば、すぐにそれに応えられる）」という諺が通用しているほどだ。実際に、市が盛り上がってくると、売り手は興奮のあまり、当の売り手自身を商品にすることすらあり得る。

わたしが猿の顔の子を最初に見かけたとき、彼は市の喧騒から少し離れた広場の隅で、バオバブの枝に両手首を括られ、素裸で吊るされていた。黒山羊の一群とともに彼を売りに出そうとしていた狡猾そうな商人は、指を折りながら片言のスワヒリ語で、その値段が宝貝八×八個、すなわち六十四個分であると告げた。この子は、Unguja（ザンジバル島）のジョザニの森で捕えられ、猫島まで連れて来られたのだという。とても珍しく、貴重な生きもので、言葉を喋るだけでなく、素晴らしい愉しみを与えてくれる。「これを見よ^{オナヒイ}」。商人は彼のペニスを手にした鞭の柄で持ち上げてみせた。そこには小ぶりの女性器があった。彼はふたりだったのだ。

わたしが、商人の言い値の通り、宝貝六十四個で猿の顔の子を買ったのは、その胸から背中にかけてひどく打たれた痕があり、飢えと渇きのためにほとんど息も絶え絶えだったことを憐れんだためではない。男性器と女性器とを両方とも兼ね備えた彼の牝に関心があったためでもない。その子と一緒になら、猫たちの呪縛から逃れて、この島から出ていくことができるので

はないかと考えたからだ。ここで何ヶ月か過ごすうちに、亡霊のようにつきまとう猫たちにも慣れ、むしろ快適に過ごすことができるようになった。だがそれが罫であり、知らないうちに少しずつ彼らに生気を奪われ、やがてはこの島の住人たちのように、操り人形のような日々を送るようになることも、どこかで予感していた。そのうち、わたしの肩の上にも、口が耳まで裂けた一匹の猫が載っかることになるのだろう。

わたしは猿の顔の子とともに、頭から麻袋をすっぽりとかぶせられ、舟底に放り込まれて猫島を離れた。だが、わたしたちは本当に、あの伸び縮みする猫島の街の壁の外に出ることができたのだろうか。猿の顔をしたふたりの子は、時おり夢を見てひどくうなされることがある。夢のなかで、彼は猫島の広場のバオバブの樹に裸で吊るされ、投げつけられる無数の石礫に身を晒している。わたし自身は同じ夢で、彼を取り囲む者たちの一人であり、[W-A-Z-I-M-U]と大声で叫びながら、彼に石を投げ続けている。

メランポ

四方田犬彦

おまえの柔毛^{にじげ}を憶えている
メランポ 葉の上の水滴が不思議で
稚^{はら}なげな前足で掃^{はら}っていた仔犬
董や蓮華の間を疾風のように駆けてきた
パンパゴス、ドルケウス、オリバソス。
腹筋の硬く締まったドロマス。
冥府の御使いのように漆黒のアスポロス。
峡谷から峡谷へ 鋭い叫び声をたて廻るヒュラクトル。
狼の血を懐かしむナペー。
ネブロポス、カナケ、ティグリス。
ひとたび獲物を捜し当てるや 急流をもともせず
断崖に追い詰め 威嚇し 樹の下に囲い込んで吠えたてる。
アエロ、トオス、メラネウス。
仲よし兄弟のリュキスケとキュプリオス。
生まれてきたことが嬉しくてたまらないと
全身が悦びであつた仔犬たち、犬たち。
それなのに 何ということだろう
おまえたちはわたしを見つけ出せない。
しきりと臭いを嗅ぎながら葡萄の葉陰を廻り、
オリーヴの繁みから泉を覗き込むわたしを
愚かしい獲物だと思ひこむと、
競い合うように吠え立てる。

わたしに最初に爪を向けたのは
おまえたちの誰だったか。
喉元に最初に牙を立てたのは
メロンポ、ナペー、それともドロマス。
もう憶えていない。何匹の
何十匹の犬がわたしに襲いかかり、
互いに争う合つて四肢を噛みちぎり
両眼を抉り出し、 血に汚れた草叢の上で
頬と唇と臓物を貪り食うのを、
しだいに青みを増してゆく天蓋の下、
わたしの魂は 遠くから眺めている。
わたしの頤^{おとが}。短く蛭^{うね}る毛髪。弓矢の散らばり。

わたしの爪と自慢の羽飾り。膝小僧の白い関節球。
それから、ああ、何ということだろう
新しく額に生えたばかりの 雄々しき角の二本まで。
トラキアの娘の虜となった楽師にしても
これほど滑稽な誤認を知ることにはなかった。

わたしに向けられた厄難の三日月が
凍てついた西空に消える。

犬たちは満喫し 地下世界へ戻って行った。
いまだに主人を求めて遠吠えをする者もいた。
柘榴の実のように散らばったわたしの齒。

犬たちはやがて神々の祝福を受け
蒼天に引き上げられ 星座として拝跪される。
いや、そもそもわたしにしても

暗黒の虚空に拉致された後

犬たちの嘲りを間近に受けながら

卑しき欲望の帰結を思い知らされる定めなのだ。

しかし それでも本気にしているのだろうか。

わたしが地上に置き去りにした齒という齒から

鉄杭のような緑の芽が生えだし

屈強な若者に育つなどという 悪ふざけの冗談を。

はまべのうた

飯沢耕太郎

ひとくらの大きさの鳥を見た
片足立ちのシルエツト

岬の近くの岩場に羽根を休めている

通り雨がざつと来て

慌ただしく過ぎ去っていった

また日差しが戻る

岬のほうに目をやると

大きな鳥の姿はもう見えない

いつのまに 飛びたってしまったのだろうか？

寄せては返す波を避けながら

素足で

踵^{かかと}が沈む砂浜を歩いていく

浜辺に人影はない

どこに行こうという当てはなく

ただただ 無心に足を動かしているだけ

あらゆる音が遠のいていく

息をするのが少し苦しい

砂浜から白いものが突き出ている

拾いあげると やや湾曲した

骨のようなもの

生きものの肋骨なのかもしれない

正体はわからないけれど

捨てるに捨てられない

片手に持ち

そのまま歩きつづける

海の彼方で

白く強い光が閃く

かなりの時間を経て

バスドラムのような轟きが伝わってくる

リトルボーイ！ リトルボーイ！

誰かが叫んでいる

よく見ると

腕の先が蟹の爪のように割れた小鬼たちだ
踊るように 巣穴に潜り込んでいく

そのまま歩きつづける

沖のほうから 生温かい風が吹いてきた
ひとが焼けるにおいがする。